



放射能再論

浅野 純次

(経済倶楽部理事)

▼福島原発の風評被害はさらに長引きそうな気配です。ボローニヤ歌劇場の歌手たちが病気などを理由に来日をキャンセルしたのも実は原発事故を恐れたことだらうとの噂がもつぱらです。ポストン美術館やエルミタージユ美術館からは「放射能に汚染しては困る」と収蔵品の貸し出しを断られました。遠い国から見れば日本全部が危ないと思えるのでしょう。

▼日本国中で福島の食品、工業品、焚き木、花火、車等々に対し、さらには「放射能が移る」と言われる避難の子供まで、民族差別以上の加害行動が起きています。

放射能を心配して避けるのは「自分や家族を守る」という誰も非難できない、しかも顔の見えない集団的正当防衛の趣です。しかし被害者の立場に立てば、そうした言動は加害者の色彩の強いものとなります。

▼自分の知見や言動が正しいと考えている人から見れば、それは風評などではありえませんが、そこで議論は平行線となります。まして政府や旧保安院、東電が正しい情報を出していないと考えれば、疑う行動こそが正解となります。さらに、放射能は1マイクログラムでも危険だという意見に従えば沖縄へ逃げるのが正しい選択になるでしょう(そこまで心配したらX線もCTも駄目、飛行機にも乗れませんが)。

▼風評被害を防ぐ道は極めて限られており、各人が被害に遭っている地域を意識した購入を心掛けることしかありません。産地証明のいらぬ外食産業あたりが福島産品を使った食事を供給してはどうでしょうか。コストも下がって一石二鳥かもしれません。

▼学者の意見も対立していて、どちらを信じてよいかわかりません。超悲観的な本はなぜか工学系の著者が多くよく売れているようですが、どれも私には違和感があります。肝臓医の児玉龍彦氏が書いた「内部被曝の真実」(幻冬舎新書)では広島原発20個分の放射能が撒き散らされたとして健康被害に警鐘を乱打しています。読むほどに恐ろしく、これでは福島を脱出したくなるし、物も買いたくなくなるのも当然だと感じました。

▼一方、放射線防護学が専門の高田純氏による『福島嘘と真実』(医療科学社)は原発サイトの外では人体に影響を及ぼすとは全く言えないレベル以下であるとして、避難にさえ懐疑的です。そしてチェルノブイリ事故や広島、長崎とは根本的に違い、今回の被曝量は桁違いに少ないことを自分で現地を計測して回った数値をもとに丁寧に説明しています。

▼一般には前者、危険を声高に訴えるほうが良心的というでしょうが、私には後者のほうが説得力があ

りました。もともとその高田さんも政府が安定化素剤を配布せず、甲状腺検査もしなかったこと、そして放出放射能の算定過程を示す報告書すら公開していないことを強く批判しています。こうした不作為が内外の不安を増長させている責任は極めて重いのです。

▼7月号本欄で書いた秋月辰一郎医師の話にご質問があったので著書を紹介しておきます。『長崎原爆記 被曝医師の証言』(日本ブックス)で、原爆投下からの地獄のような1年が詳細につづられています。被曝した人々のさまざまな苦難を読み続けられれば、福島と原爆を同列に論ずる議論には抵抗を感じざるをえないのが率直な感想です。秋月さんは爆心から1・8キロの病院で被曝したうえ、藪をうりて瓦礫の中を歩き回ったり被曝した土地の野菜を食べたりしていたのですから、100ミリシーベルトどころではない被曝をしていたはずですが、塩分の強い食事を徹底して89歳の長寿を全うされています。一説をお勧めします。